

## アウトリガーカヌー

小笠原への最初の定住者はハワイからやって来た人たちで、アウトリガーカヌーづくりの文化をもたらした。小笠原で使われている伝統的なアウトリガーカヌーにはマストと帆が付いており、網がボートとアウトリガーの間に張られていた。また、水を蓄えて魚を保存できるようなスペースも設けられていた。現代のアウトリガーは伝統的な設計をもとにしながら、魚の保存スペースを無くす代わりに座れる人数を多くしている。母島カノークラブでは、島で作られていた伝統的な木製アウトリガーと同じサイズのファイバーグラス製のものを数多く所有しており、地元の学校で子どもたちに乗り方を教えたりイベントを開催したりすることで、地域社会とともに伝統を守っている。

毎年、ファイバーグラスのカヌーを使って、カヌー大会が催される。カノークラブも強いレースチームを作ることに取り組んでおり、チェコからレース用のアウトリガーを輸入し、それを使ってトレーニングを行っている。2018年には、父島から母島までの60キロメートル余りをこのレース用のアウトリガーで成功した。